

編集後記

編集長(ダン シロウ)

私達の暮らすこの世界が、問題を抱えないことはない。四六時中、様々なテーマが要・解決課題として、生活の前に立ちほだかる。

当事者はその時が初めての経験、素人であることが大半だろう。だから専門家、スタッフにその対応を委ねることになる。ここにあらゆる領域での対人援助サービスを担う者が登場する。

しかし個人には初めてかもしれないが、社会は既に何度も経験済みのことである場合が多い。日本人として初めての出来事に遭遇することや、人類として未だかつてない事態に直面するなんて事は先ずない。だから多くの問題は専門家の手でスムーズに解決されてゆくはずである。ところが現実はそのようではない。

今号に掲載の中村周平「ノーサイド」を読むと、学校スポーツ事故の対応において、日本社会が採用している仕組みが、いかに空しいエネルギーを当事者に強いているかがよく分かる。

どのような問題だろうと、解決について検討され、試行錯誤の中で、経験の蓄積から進化を遂げていくものなのだ。ところが、それを受け入れない力が存在する。

誰なのか、何故なのか、よく分からないが、こうすればより合理的だと実証されているのに、それを採用しない。そして、相も変わらず、当事者同士の苦しい紛争解決事態として、傷つき合いながら時を過ごす。

本人や家族の人生が、一つの事故とそれを巡る解決の道筋によって、何もかも吸い取られてしまう。そんなバカな話があるだろうかと思うが、現実はそのようなのである。

私達は問題に苦しんでいると思いがちだが、それは正しくない。誤った問題解決の道筋に苦しんでいる。

対人援助学マガジンでは、様々な分野の最前線で今、どんな課題が、どのように取り組まれ、そこではどんな進歩が成し遂げられているのかを、情報提供と共に、考え方も提示できたと考えている。

同じく今号の、荒木晃子「卵子提供の“いま”も、まさに我々の時代が直面する、最先端技術と人間の欲望の話だ。そして

これは当然、様々な切り口からの他の連載原稿の中にも読み取れる今日の日本社会のテーマである。

ここをこんなに熱く、厚く語っている雑誌は希なのではないかと思う。業界サロンや同好の士の集いの会話のような文章を集めた業界誌が現状を切り拓くことはないだろう。

無料定期刊行を崩すことなく、小さいながら世界発信(日本語である限界は呑み込んで)しているWebマガジンの誇りは高い。

編集員(チバ アキオ)

この4月から勤務の形態が若干変わった。そのため、週何回かは午前7時過ぎには職場にいる。それが私の今年度の変化である。通勤には片道40分かかかる。京都市内でも電車ルートは不便で、バスルートが1時間に1本程度しかないところの2か所まで主に仕事をしているとおのずとマイカー通勤になる。午前6時台は道路もすいていて、日差しも今は柔かい。環境関連の職場は朝がはやい。始業すぐの収集スタート、24時間の焼却炉の稼働があると早朝からすでに人の出入りが多い。そんな施設と隣接している環境関連の仕事を生業としている福祉施設もスタートが早くなる。通所施設であるが朝6時台には開錠、すぐに職員の早い方は出勤し、それぞれの仕事、仕事の準備を始める。屋は利用者、職員合わせて70名規模で動く職場も、朝は人が少なくひっそりとしている。とても広く感じるし、鳥の鳴き声もよく聞こえる。朝はやい時間帯には自分のためだけではなく、共有スペースや自分が関係のないところまでも整理整頓、清掃に徹してくださる方もいて脱帽である。環境の仕事は掃除に始まり、掃除に終わる。そんな掃除中にも、始業前なので、いつもはできない立ち話もできたりする。始業前に自主的にしていることは誰かに気づかれたりしないまま終わることもある。仕事だから、他の人もしているから、これでお金をもらっているから…というだけではない行為である。気づかれていないようで、結構人は見ている。わかる人にはわかる。★このマガジンも見えていないようで見ていると実感することもある。このマガジンの意図や可能性もわかる人にはわかっている。仕事だからでもないし、お金になるからでもない。今持っている仕事に対して少し視野を広げ、アンテナを張ると十分に見える。始業前の仕事と共通点も感じることも多い。

編集員(オオタニ タカシ)

ここしばらく、連載のテーマにしている K 式発達検査について、いくつかの場でお話させて頂く機会があった。「発達検査」

というものについて、批判的な見方があることも確かである。人のそだちや内面を数値化してもよいのかという問いには、いつも自分なりの答えを用意しておかないといけないと思う。一方で、「発達検査」について「検査をしたら、その子の発達のことが何でもわかるんじゃないの？」という、やや安易な見方もある。自分自身も過去に同じように思っていたので、そのことを批判するつもりはない。多くの先生や同世代の仲間、子どもたちから教えてもらったことを整理し、精一杯のことをお伝えさせていただいたつもりだ。つまるところ、アセスメントにも発達支援にも“これが正解！”という教科書はなく、最後の最後は、“その人に合うかどうか！”という個性だ。自閉症の人に対して何でも視覚化すればよいというものではないのは、既に多くの人が経験的に理解しているところだろう。

この世界は、極めて個別的な事柄が、様々につながって形成されている。教科書が、それらの個別的な事柄の共通項を取り出し一般化するものであるとするならば、対人援助学マガジンはその個別的な事柄を、その個性のままに扱っていく雑誌であるといえる。40本を超える連載の中には、自分がこれまで知らなかった事柄、知らなかった世界が、数多く含まれている。「多様性を尊重しよう！」などという手軽なかけ声とは違うレベルで、本当に丁寧に扱われている多様な、個別的な事柄が集う場所。それが、この対人援助学マガジンである。そんなことを考えた、自身20回目の編集会議だった。

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は
danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町438
ランプラス二条御幸町402 仕事場D・A・N

対人援助学マガジン

通巻29号

第8巻 第一号

2017年06月15日発行

<http://humanservices.jp/>

**第30号は2017年09月15日
発刊の予定です。**

原稿締切2017年8月25日！

常に新規執筆者を求めていますし、お誘いすることもありますが、執筆依頼はしていません。

自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分の専門分野の今日記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

連載誌ですが必ず何回以上と決めているわけではありません。必要な回数(ずっと・・・というのもあります。多くの方達が連載8年目を迎えています)を、書いていただけるよう設定します。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

執筆資格は学会員であること。したがって書いていただく方には、対人援助学会への入会をお願いします。まだ登場していない、対人援助領域からの積極的参加を求めます。

対人援助学会事務局

〒603-5877 京都市北区等持院北町56-1
立命館大学大学院応用人間科学研究科内
TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届

〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1
リファレンス内
TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

表紙の言葉

木陰の物語のカラーパネル版を毎年この時期に制作する。夏から東北で始まる東日本家族応援プロジェクトの準備だ。2011年から毎年続けている取り組みだ。

その彩色作業の中で時々、意味なく気に入る絵が現れる。今回はその人物の一人。物語では何の活躍もしない。ひと場面だけに現れて、そして消える。そういう登場人物もある。

(2017/6/1)